
world death(世界殺し)

煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

w o r l d d e a t h (世界殺し)

【Nコード】

N 1 9 2 1 A

【作者名】

煉

【あらすじ】

世界に「殺される」運命の少年・百夜は自らに服従する桜花を連れて、世界から逃れ、この世で最も愛する2人に会うために、もう一つの「次元の世界」に立つ。

プロローグ

「まけたみたいですね・・・」

夜、廃墟に2人はいた。

あたりを気にする一人の「男」は帯刀された小刀を、隣にいる「少年」に手渡そうとした。

だが、

「いないよ。そんなもん」

「・・・しかし、護身刀を持たなければ・・・」

「少年」は懷からタロットカードを引き抜いた。

「！」

目に見えない速さで、「男」を襲おうとした人影の喉を刃が引き裂く。

「あ・・・」

後ろに倒れる人影を眼に、「男」は唾然とした。

「た、助かりました。百夜」

その声に答えるよう、百夜が促した。

「油断するなよ？今だって数千人の奴らが、俺らを狙っているんだ」
「・・・数千人」

「何だ？今更 怖じ気つ”いたか？」

眼光が「男」を貫く。

少年の・・・百夜の姿が、月明かりと共にはつきりと現れる。

切れ長の目、黄がかかった緑の髪、そして誰もが圧倒される存在感の象徴。

「彼」自身。

「世界は俺を殺したいのさ……桜花」

世界は、2つ存在する。

1つは「文明」の成り立つ「科学の象徴」の世界であり、夢や未来に対する希望が溢れ、そして「戦争」がどこかで起こる汚れた世界。

1つは「人間」の存在が「すべて」であり、自分がやりたい事、欲しいものを手に入れられ、そして「憎悪」に溢れる汚れた世界。

どこか、似通っていて
どこか、違う2つの世界。

1つの世界は「発展」にすべてを注ぎ、そのために「殺し合い」の結果を招いた。

1つの世界は「人間」にすべてを注ぎ、そのために「憎しみ」を生

んだ。

同じで有、「対極」。

世界はそうでなければ存在しない。

そして、

世界にはルールがある。

- 1・世界の時間の流れは違う事。
- 2・世界を平等にはしていけない。
- 3・世界に干渉してはいけない。

このルールで、特に3は非常に重要である。

もし、1つの世界がもう1つの世界に干渉してしまった場合には・・・。

ドサッ。

「何・・・あの人達・・・っ」

部活帰りであろう女子高生は、カバンを落とした。

・・・人が、殺された。

しかもカードで首が切れた。

物陰に隠れながら彼女は殺した本人達を見つめた。

（・・・まだ中学生ぽい奴と・・・隣は高校生の奴かしら・・・）

恐怖に震える手に、なんとか携帯を持つ。

（・・・早く・・・連絡しないと・・・！）

「・・・警察に？」

穏やかな良い声が、彼女に問いかける。

「な!？」

鋭い眼光の少年が、自分を見ている。

まるで、見ていた事を最初から知っていたかの様に・・・。

「ねえ、警察に電話するの？」

「っつ!?!」

彼女は後ずさる。

百夜は「あらあら」と呟いた。

「そ・・・そうよ!警察に連絡する!!!」

「・・・逃げないの?根性座ってるね」

別に根性が座っている訳でもない。

怖くて、足が動かないのだ。

どうしようもなく怖く、危ないと分かっているのに足が拒否する。

「逃げれない」と。

「ふーん……。電話するなら電話すれば？」

「……！」

彼の超然とした態度に、指まで動かせない。

その時、

「あっ」

携帯が2つに割れた。

「……！」

百夜が何か感じ取ったらしい。

2つに割れた携帯を取り、それを女子高生に渡すと彼女の耳元に囁いた。

「・・・見逃します。早く逃げなさい」

彼女は桜花の顔を見る。

女性の様な端正な顔だった。

袴を纏い、長い髪を後ろに1つ束ねている。

その2人が並ぶ姿は、あまりにも神々しく
この世のものと思えなかった。

そして、同時に眠気が迫り来る。
目を開けていたのに、眠気がそれを許してくれなかった。

「・・・貴方達・・・何者？」

「・・・この世界の違う世界から来た者。」

・・・・・・・・あんたに関係無い。」

気がつくと、自室のベッドにいた。

「晶ー？起きたの？」

母の声がした。

全部・・・夢だったのだろうか？

「晶、今日近くの売買中のアパートの近くで人が殺されたんだって。危ないから違う道を通りなね」

・・・・・・・・夢、じゃない！

千里晶は制服に着替えると、玄関に走り出した。

「晶、ご飯は？」

「いない！」

走り出し、昨日近道に通ったアパートに向かう。

まさか、だと思う。

「!!」

重大な事を思い出した。

カバンの中の、携帯。

もし2つに割れていれば・・・それは「現実」の証明。

「・・・うそ・・・」

夢、じゃなかった。

そして本当の悪夢は、これから訪れる。

黒板に書かれる文字。

名前。

「現実」の証明。

「闇鈴百夜です。よろしく」

その時も、彼は不敵に笑った。

act. 00 剣客（ソードマスター）

「初めての転校なので・・・まだ慣れませんが
よろしくお願いします」

人懐っこい笑顔で、「人殺し」はそう告げた。

「ねえ闇鈴君！」

授業後、何人かの女子が彼の前に群がってきた。

お約束の「転校生モテ」というやつだ。

そんな彼をずっと見ている生徒がいる。

千里晶。

（でも、こういうのに限ってクールとか無愛想なのよね・・・）
ボンヤリ考える。

友達に「こいつ人殺しだよ」と授業中にメモを廻したが、全く相手にされなかった。

そのため、遠くで「百夜」を見ていれば何か問題を起こすだろうと
踏んだ。

きっと、自分に寄る女子は全員クズだと思い切り捨てる筈。

今まで読んだ少女マンガやテレビだと、いつもそのパターンだ。

しかし、だ。

「闇鈴君、メアド教えて〜」

「いいよ。いつでも送ってくれていいから」

「誕生日とか、いつ？」

「11月22日」

「好きなアイドルとかいる？」

「アイドルよりタレントが好きかな」

・・・ちゃんと律儀に答えてる。

これまたお約束の「好きな食べ物は何？」というのにも。

まるで、昨日の態度が嘘のように。

「好みの子とか、いる？」

「！」

千里は顔を上げた。

転校生に向かって、いきなりその質問は無いだろう。

（最近の子はそこまで進んでんの！？）

・・・

・・・自分も最近の子だけど。

という言葉葉を飲み込む。

「そうそう、付き合ってる子！」

とうとう百夜に視線が一気に注がれた。

女子だけでなく、男子にもだ。

「えー？好きな子？」

本人はあえて茶化している。

「だって百夜君カワイイし、絶対に付き合ってると思うもの」

・・そうは思えない。

晶は質問攻めされている白夜の目を見つめた。

あの目は鋭くもあるが、どこか他人をバカにしたような目だった。
自分が見た「人殺し」の顔は。

「・・・・・・。」

暫くしても、彼は答えなかった。

意外でも無かった。

当然だと、感じたのだから。

「こら！席に着く！！」

クラスの担任・高野が入ってきた。

暫く、風邪で休んでいた。

「ねえ千里さん」

「!? 何」

百夜の声に僅かに身を引く。
そういえば席が前後だった。

「あの人誰？」

「担任の高野」

「今来たの？」

「風邪で休んでいたのよ」

出来れば、これで会話を止めたい。
昨日の今日だし。

「ねえ」

「まだ何かあんの!？」

つい大声を出してしまい、高野の怒りの視線が飛ぶ。

（やばっ・・・）

その原因でもある百夜を見た。
呑気にも何か書いてる。

何か書かれたメモが晶の机に廻された。

メモには

「授業の間、少し喋らない？」と書かれている。

いわゆる、中学生あたりが楽しむ「文通」だろうか。

まあ、高校になってもやっている事だが。

考えている間にもメモはどんどん廻されてきた。

「女子で喋って無いのは君だけだからどうしても話したくて」

フェミニストだろうか？

メモ
言葉を返す。

「君じゃない。千里晶」

「じゃ、晶」

「いきなり呼び捨て？」

「千里」

「何よ」

「俺に質問して。千里の質問に答えたい。」

「は？」

「いいから俺に質問して」

「何を」

・コレだけでもメモが5枚減った。

新しいメモ帳を用意する。

「千里の知りたいこと」

・・・悟る。

彼は自分があの日撃者か確かめているのだ。

もし、気付かれたら、どうなるのだろう。

いや、その前に彼の正体を探らなくてはならない。

それとも、質問を放棄するか。

どうせ「無い」と答えてもメモを送り続けられるだろう。

「闇鈴の＜本当＞の誕生日は？」

「5月6日」

やはり、あの質問攻めの答えは全部嘘だったのだ。
なら、

「本当に＜転校＞してきたの？」

「それは本当」

「＜百夜＞は本当の名前？」

「うん」

あまりにも怪しく聞くので、もうバレているのかもしれない。

でも、それより彼の正体の解明の方が正しいと考えた。

「好きな子はある？」

「好きかは分からないけど彼女ならいる。」

「気になっている人とか、大切な人は？」

「探してる」

・・・サガシテル？

「どんな人？」

メモは来ない。

「カワイイ？」

来ない。

「何で探してるの？」

こない。

さらに追求を求めようとした時、チャイムは鳴った。
授業はよりによってテスト範囲。

「ごめん飛鳥・・・」

晶の級友で、中学も同じだった頼れる存在・須藤飛鳥はノートを見せながら

書き写しを手伝った。

「いいよ、別に。でも珍しいね・・晶が授業に身が入らないなんてシャーペンの芯をペンに詰めた。だが途中で折れてしまう。」

「闇鈴と文通してたのよ」

「闇鈴君？」

丁寧に線をなぞっていた飛鳥は動きを止めた。

「どうしたの？」

「晶・・こんな事言うの・・どうかしてるけど・・あんまり闇鈴君に近つ”かない方がいいよ」

「え？」

「何か分かんないけど・・私・・闇鈴君の目・・凄く怖いもの。あの人 came とき・・一発で分かったもの」

飛鳥の指が心細く震えていた。
何故、怖いと思ったのだろうか？

「あ」

「どうしたの晶」

「美術部・・もう終わっちゃう!!」

「ええっ」

急いで教科書をカバンに入れ、階段を駆け上った。
飛鳥は下階に下りる。

「じゃ！あたしバスケ部だから！！」
「またね！」

途中で先輩にすれ違った。
もう、部活も終わったのだろう。

早く、早くしないと。

ガラッ！！

ドアが勢い良く開いた。

そして目の前にいた童顔の知り合い。

さっきの今で会いたくない闇鈴百夜だ。

「……さよなら」

声を掛けて美術室に入ろうとする。
普通ならそれで終わりだ。

普通なら。

「へー・・・千里って美術部なんだー・・・どの絵描いたの？」

「あんたには関係ない！！」

大体なんで部外者がここにいるのよ！」

「部活見学」

・・・・・・

普段なら心地の良い絵の具の香りが、イラついているためか後味の悪い匂いに変わった。

「ねっ、どの絵描いたの？」

あえて、答えない。

「この絵？・・・違うな」

正解。

「この絵も違うでしょ」

正解。

「あ、この絵だ！」

・・・・正解。

「すごいな千里！タイトルは？」

「水底の虚像」

渋々と答える晶に百夜は嬉しそうだった。

その絵は、水に写った自分が水底を覗いている自分を嘲け笑っている絵だった。

色使いは白と水色の単純なものだが、そこには惹かれる「何か」がある。

「コンクール出したの？優勝でしょ」

「第1次にも通らなかった」

「じゃ、審査員の目がおかしいんだよ」百夜は絵に触れる。

「いいなー。俺も絵上手かったら美術部入りたいなー」

「描いた事ないの？」

「ない」

嬉しそうな態度。

考えてみれば、何故ここまで自分に話し掛けるのだろうか？

理由は分かってはいるが。

「私が目撃者だから話し掛けるんでしょ。人殺し」

「まあね」

ほら。

「何で私に声を掛けるの？人殺しなんだから私を殺せば口封じになるじゃない」

「君を殺すつもりは無いしね。てゆうか、君みたいな強気な子・・
気に入ってるんだ」

後ろを向いたまま、百夜は語る。

「普通ならポジティブ思考で只・・その「人殺し」と似ているだけ
だって思う筈なのに、
君は俺をちゃんと「人殺し」と認識してくれた・・たった1人なんだ。」

「意味が分からない。」

「君が見た殺された人・・アレ、君の知ってる、
こっちの世界の人じゃないよ」

「どういう意味？」

やっと振り返り、百夜は言った。

「世界は1つじゃ無いって事さ」

彼はそのまま歩き、教室を出た。

暫くその後姿を眺めていたが我に返り絵に視線を移す。

彼の見ていた絵に、メモが貼ってある。

「あんたの絵、結構好きだよ」

本心か偽心か・・・どちらで言っているのだろう。

「晶ーーーーっ!!」

校庭から、大声で呼ばれた。

バスケ部メンバーの声だ。

窓から身を乗り出し、声を聞く。

「何!？」

「飛鳥・・・飛鳥見なかった!？」
半分、涙声だった。

「飛鳥!？」

「部活に來ないの!! サボったのかと思って電話してみたら・・・家にも帰ってなくて・・・飛鳥の家・・・ここから、ちょっとなのに!」

「・・・寄り道とか？」

「飛鳥・・・そんな事する子じゃないもの!!」

「でも・・・」

「それに、道路に・・・飛鳥の荷物が散らばってて・・・」

なら・・・誘拐？

帰り際、その声を聞いた百夜だったが、校舎に戻る事も無かった。

家に着いた早々、晶は自転車に乗り込んだ。

親の声も聞こえなかった。

「飛鳥がいなくなった。」その事実が心配でたまらない。

(飛鳥・・・どこ!?)

飛鳥が通る通学路・・・まだ彼女が帰ってない家・・・
飛鳥が好き好んだ店・・・図書館・・・

どこにもいない。

猛スピードで走っていた自転車は信号でストップをくらった。

「・・・そんな・・・」

思わず、声が漏れる。

このまま・・・飛鳥が見つからなかったら・・・このまま・・・ずっと・

恐ろしい疑問が湧き上がる・・・。

何故か・・・どうしてか・・・

目を無意識に閉じた。

車の騒音が、煩かったから。

飛鳥を探す邪魔をするから。

只、本当に無意識に。

次の瞬間、目の前は砂漠と化していた。

崩れた建造物、まるで戦があったかのような熱で折曲がった銃。

そして・・・死体。

「ヒッ・・・!？」

圧死された死体。

切断された死体。

出血が大量の死体。

たくさん死体が、自分の足元にあった。

「だ・・・誰か・・・」

逃げたくて、走りだす。

そこも死体。

足元すべてに死体がある。

顔半分の間人が、晶の足を掴んだ。

「やだ! 離して・・・!」

少し蹴っただけなのに、その人間の手は骨が碎ける音と共に手首と切り離された。

「ああああああああっ!?!?!?」

もう、悲鳴にもならない。

走って、走れる所まで走った。

その時だ。

（誰かが・・・こっちに歩いてくる？）

怪我でもしているのかよろけている。

しかし、肉眼でも「まだ」人間の形を保っている生きた人間だと確認できた。

「あ・・・あの・・・っ」

「駄目だ！」

誰かに、手を握られた。

その声は・・・どこかで聞いた・・・

「闇鈴？」

目を瞬きさせると、そこはもう交差点だった。

「大丈夫。イリユーマジシャン 幻覚師の幻術だから・・・
直接干渉していない」

「な・・・何よ干渉って!？」

「幻術に掛かったんだよ千里。ホラ」

道路側には、自転車が車と衝突した無残な姿があった。

「な・・・何コレ・・・」

「俺に関わった奴は全員殺される。なんの罪も無い君も」

多分・・・したかった質問はこれだった。

けど、何故かできなかった。

もっと早く聞けば良かった・・・と思う。

「貴方・・・何者？」

「・・・俺は＜晶＞が見た幻の世界の人間。

この世界に干渉した事で「あっち」の世界を壊して、みんなを殺した罪人。

「世界」に殺される男だよ」

声が出なかった。

意味が分からない事もあるだろうし、半信半疑の思いもあるだろう。でも、

それより・・・

「世界に・・・殺される？」

「そう。」

つまり、世界を敵に回したという意味だ。

という事なら・・・

「あんたが・・・人殺しをしたのは・・・不可抗力なの？」

不可抗力で人を殺す。

今の世の中では、ある事だ。

・・・しかし。

「・・・ごめん晶。俺・・・須藤さんの居場所知ってる。」

「え・・・」

「多分幻術の世界の中だと思う。・・・ごめん。」

「何で・・・あんたが謝るの？」

「俺のせいだから」

世界の敵。

世界の殺す対象。

「ねえく百夜＞・・・飛鳥の所に連れてって！」

「駄目だよ・・・危険すぎる」

その声には、どこか痛々しさがあった。

悲しくて、切なくなる。

「・・・お願い・・・」

しかし、彼だけに任せて置けなかった。

・・・
・・・
・・・

「じゃあ・・・晶・・・俺の願い・・・聞いて」

「何？」

「須藤さんを助けたら・・・俺の友達になって・・・」

！

「君が・・・あんたが・・・俺の存在を認めてくれた「この世界」で、
たった1人の
人間なんだ・・・。だから・・・」

ああ、そうなのか・・・。

・ 彼が人に律儀で愛想が良いのは・・・誰かに相手にされたいからで・・・

「いいよ」

ずっと、寂しくて・・・「孤独」だから・・・

百夜が、「本当の笑み」を見せた。

「じゃあ、行こうか・・・」
「うん」

「これ・・・持って・・・」
カードを手渡された。

「カード・・・」
「刃物が仕込んである。」

・・・一瞬、走馬灯のように人殺しをした百夜が見えたが、
自己暗示で眩く。

「・・・怖くない」

隣には、百夜の寂しそうな顔があった。

目を閉じる。

そして、あの世界が広がる。

「よく、来ましたね？」

そこにいたのは、黒衣を纏った金髪の少女だった。
晶より小さい。

「嫌な幻覚を見せてくれるな」

「貴方がした事でしよう？」

両者とも譲らない。

「なんで俺だけを狙わない！？真に殺されるのは俺だけの筈だ！！」
「世界の敵に回った者の味方をする人は皆、同罪。・・・当たり前です」

タロットカードを制服の上着から出し、少女に斬りかかった。

その、瞬間だ。

「百夜！？」

百夜の姿は、見る影も無く消えていた。

「彼には・・・暫く幻と遊んでもらいます。」

砂漠の砂が目に入る。

幻の筈なのに・・・目が痛い。

「貴方・・・名前は？」

少女の言葉に、晶はカードを握る。

「千里晶」

「威勢が良いんですね。」

あどけなく笑う。

それは少女に釣り合う笑みだった。

「晶のお姉さん、貴方は百夜の味方？」

「・・・そうよ！」

はっきりと言えた。

何故だか・・・はっきりと。

「百夜は・・・裏切り者なの？」

「違う！」

孤独なのは「彼」だ。晶は自分に言い聞かせた。

「百夜は・・・人殺しだよ？」

「違う！」

決心が揺るがぬよう、言い聞かせる。

だって・・・約束した。

ひとりぼっちの「彼」に「友達」になると言ったのは。

・・・だから・・・。

「・・・・・・・・わたしの・・・パパとママも殺したのに？」

「え」

少女の目に涙が伝っていた。

彼女は語る。

「パパとママと一緒に・・・ピクニック・・・行くなって・・・約束・・・してたのに・・・」

声が、嗚咽に変わった。

「あ・・・」

約束。

閃光が走った。

少女の肩を切り裂く刃。

紅い・・血。

そこには、もう一人の「人殺し」

帯刀し、袴を着た端正な顔の男・・

少女は痛みに喘ぎながらも、その男を睨んだ。

「お前・・・百夜の狗・・!!」

鮮やかに剣を振る。

もう一本の剣を抜刀し、二刀流を構えた。

「・・あなた」

晶が声を掛けた。

振り向くと、彼は名乗る。

「百夜の絶対服従の狗であり、世界の敵である・・・」

ソードマスター
剣客

桜花 椿

「そして・・・」

百夜が後ろに立っていた。

飛鳥を抱えている。

それよりも、

「・・・びやく・・・や・・・？」

血にまみれた百夜。

パパとママを殺した人殺し。

「桜花は・・・俺という死神に囚われた吊るされた男だよ」

犠牲。

少女が肩を抑えながら、百夜に近づく。

百夜は逃げなかった。

「あんた・・・最低よ・・・」

10歳位の少女は小さい背で百夜の首襟に掴みかかった。

「パパとママを殺して・・・！あんたばかり幸せになって・・・」

「俺には親がいないから、よく分かんないや」

明らかに、どっちが最低か分かる言葉。

「死神！死神めっ！！パパとママを返してよ！
そんなんだから・・・」「一さん」も・・・っ」

言葉が言い終わらないうちに、カードの刃は幼い少女の頸動脈をかき切った。

「・・・そうだよ。俺は死神だ」

世界は消え、元の交差点だった。

「晶・・・この子・・・」

「・・・！」

晶は身を引いた。

「晶」

「・・・あ・・・」

自分は何をしたのだろう・・・。
拒絶を・・・完全に拒絶をした。

「・・・」

百夜は黙ったまま、飛鳥を寝かせた。

「ごめん・・・百夜・・・」

何を言えぱいいのかわからない。

いいたい事はたくさんあるのに。

「彼」が一番辛いって・・・わかってるのに

「百夜・・・！私・・・これから、ずっとあんたの味方してあげるから
！！」

「・・・。」

「私達・・・ずっと友達だか・・・っ」

冷たい指が、晶の額に触れた。

「いいんだよ・・・晶。俺がワガママ言ったんだから。」

死神の俺は・・・あんたの重荷だから。

ただ・・・俺を見ても・・・俺と認めたあんたを・・・
・・・友達に・・・なりたくて」

只、切なくて・・・その声を聞きながら
晶は意識を失った。

「・・・桜花」

「はい」

「晶と須藤さん・・・家に戻ってきて」

「・・・はい」

百夜の声は淡々としていた。

「それと・・・俺と晶の文通メモ、処分して欲しい」
「・・・」

「次に晶の目が覚めた時・・・みんなは俺の事を覚えてない。
・・・それでも・・・」

「晶さんと1日だけでも友達でいれて良かったですね」

「・・・うん」

それだけ言うと、百夜は夜の街に消えていった。

act. 00 + a 終電 (バッドドリーム)

いつも、あの「夢」を見る。

今でも・・・忘れられない夢を見る。

『一生、百夜を守るよ』

俺の愛した女も言ってくれなかった「言葉」。

それだけじゃない。

「あいつ」は、この世で一番大切な人だった・・・。

好きな女よりも、「あいつ」を守ってやりたかった。

もう1つの世界で・・・薄暗い部屋で遊んで・・・

そんな俺を・・・明るい世界に出してくれた

『・・・中尉』

昔は・・・呼べてた名前も、今じゃ呼べない。

罪悪感が胸に染みるんだ・

だって・・・俺は・・・

『・・・・・・・・コロシテヤル』

「・・・・・・・・百夜」

「!」

桜花の声で我に返る。

電車走る音が、肌で感じられる。

「悪い・・・肩・・・借りちまって」

「良いですよ」

静かに喋る剣客は似合わない洋服の裾を正した。

「ごめん。・・・・・・・・まわりの人に怪しい関係と思われたら・・・」

そっちの心配の方が大事だった。

「気にしないで下さい」

いや、気にしろよ。というツツコミは控えておく。
それより、そんな元氣さえない。

吐き気がして、腹が痛い。
熱もありそうだ。

腸炎にでもかかったか？と思っている自分が情けない。

体調の悪さの原因は、他にある筈なのに。

「・・・一さんの、夢でも見ましたか？」

「・・・ああ」

桜花は悟っている。

・・・桜花にしか悟れない。

「久しぶりですね。そんな夢見るの」
車体が揺れる。

前座席には、会社帰りの社員の姿しか見えない。
社員は鬱そうな表情だった。

自分も鬱になりそうだった。

そうならないために、百夜は唯一の話し相手に口を開く。

「・・・俺、さ。色んな事やってきたけど・・・

中尉に「やってしまった」事だけは、やっちゃいけない事だったんだと思う。」

「・・・」

「いや、他の事も悪いよ。けど・・・「あんな事」だけは・・・やっちゃいけないかった。」

「でしょうね」

少し微笑み、絶対服従のこの厳しい男の肩に身を任せた。

多分、次に夢を見る時は・・・「彼女」の夢が見たかった。

自分が唯一・・・愛せた少女「葵」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1921a/>

world death(世界殺し)

2010年12月30日14時09分発行